

# 文化祭のステージで全校生徒にPR

## ベルマーク便りコンクール2021特別賞・福岡県立武蔵台高

福岡県立武蔵台高等学校(金丸敏雄校長、生徒 1141人)が昨年度のベルマーク便りコンクールで特別賞を受賞しました。2021年度の活動を担った保健委員会の生徒たちにお話をうかがいました。

保健委員は年2回、各3~4カ月の収集期間を設けて生徒に協力を呼びかけ、最終日に各クラスから回収袋を集めます。川原峻さん(3年)によると、「校内1カ所に回収箱を置くのではなく、各クラスに手作りの袋を置いていること」がポイントです。

クラス別の枚数ランキングも出します。昨年度第1回の回収では、986枚も集めたクラスがありました。前委員長の早川裕菜さん(3年)と、前副委員長の森楓菜さん(3年)は、「保健委員の生徒一人ひとりへの呼びかけや、先生によるサポートが要因」と分析しています。

その「呼びかけ」のツールのひとつが、お便りです。毎月作成する人が異なるため、それぞれに個性があります。

例えば、川原さんと森さんが工夫したのは「収集するメリットを書いて、協力を得られるようにすること」でしたが、丸山姫生さん(2年)と石原日菜多さん(2年)の場合は「字を少なく、イラストや写真を使った、読みやすいお便り」を目指したそうです。

さらに昨年度は、新しい取り組みとして文化祭でのステージ発表にも挑戦。全校生徒を前に、資料を見せながら、運動の概要や目標を伝えました。これらの広報活動が特別賞受賞につながりました。

その結果、予想以上に多くのマークが集まりました。全校生徒の協力を得られて嬉しい気持ちや、仕分け・集計をやり遂げた達成感を味わえたそうです。

今後の目標は、冷水機を買うことです。川原さん、森さん、早川さんは3月に委員会活動を引退しました。活動を引き継いだ丸山さんと石原さんは「今年度は去年の倍のマークを集めたい」と気合い十分です。



④保健委員の皆さん ⑤⑥仕分けの様子 ⑦⑧文化祭での活動発表



④池上彰さん ⑤防災科研の林春男理事長(左)と池上さん ⑥パネルディスカッションの壇上

# 「一人一人が主体的に考えて行動を」

## 防災科研の成果発表会でディスカッション

ベルマーク財団と「防災科学教室」を共催している国立研究開発法人防災科学技術研究所(防災科研)の令和3年度成果発表会が2月28日、東京国際フォーラムで開かれました。コロナ禍に配慮し、ウェブ配信とあわせたハイブリッド開催です。今回の報告会は「来るべき国難級災害に備えて」と題した3年シリーズの2年目。南海トラフ地震など大災害への備えを意識した取り組みです。

今の予防水準なら国難級の災害を「乗り切れる」「そうは思わない」——。第3部のパネルディスカッションは、リアルタイム質問システムを使ったアンケートから始まりました。結果は86%の人が「そう思わない」。特別ゲストコメンテーターとして参加したジャーナリストの池上彰さんは「乗り切れる、が多かったら、そもそも本日は成立しません」と

笑わせつつ、「本当に国難にせず乗り切るためにはどうしたらいいか、考えていきましょう」と口火を切りました。

研究者3人が事例発表した後、防災科研の林春男理事長も加わって討論が始まります。林理事長は「災害の予防は、施設を強くするだけの時代ではない」と強調。ハードとソフトとの密接な連携が必要だと話しました。災害時に人々がどう行動するか。それがポイントです。

質問システムで参加者に「災害時に自身がすべきことは」との問いが投げられ、「状況把握」「安全な場所に移動」など様々な書き込みが返ってきました。これに対しパネラーから「みんな抽象的」との批判も。具体的に何をどうするのか、リアルに考えるところから始めなければ、というのです。池上さんも「抽象的、に逃げないことが大事」と話します。

実際に災害に遭遇したら、それぞれが主体的に考えて行動しなければなりません。その主体性はどう育めばいいか。林理事長は「納得できる答えを得るプロセスが大切」と説きます。池上さんは東日本大震災の津波避難を例に挙げながら、「たんに答えを求めるのではなく、一人一人が自ら問いを立てていく、ということこそを是非してほしい」とまとめました。

パネルディスカッションに先立って、発表会の第1部では防災科研の最新研究成果が発表されました。第2部では、あらかじめ研究者たちがウェブ上で発表していた研究成果から動画とポスター各3点が表彰されました。

2021年度の成果発表会は会場参加約130人、ウェブ参加は約570人でした。防災科研のYouTube公式チャンネルで会の全体を視聴できます。

# 「防災とジェンダー」を考えてみよう

## 防災科研研究員がオンライン講演

「防災とジェンダー」と題したオンライン講演が3月5日にありました。講師は、国立研究開発法人防災科学技術研究所の特別研究員、松川杏寧さん。災害や犯罪などの危機に際し、より安全・安心でいられる社会をめざす研究をしています。

この講演は3月8日の国際女性デーにちなんで、公益社団法人ガールスカウト日本連盟が中高生向けに企画したオンラインイベントのひとつです。

「自然災害は原因(ハザード)と『ぜい弱性』が重なりあって生じます。被害が発生すると、災害と呼びます」と松川さん。では「ぜい弱性」とは?

松川さんによると、2010年に中米のハイチと南米のチリで地震がありました。規模はチリの方がずっと大きかったのですが、ハイチの方が多くの犠牲者が出ました。普段から地震が多いチリに比

べ、ハイチでは備えが不足していました。これが「ぜい弱性」です。

ハザードを小さくすることが「防災」。護岸工事や耐震工事などハード面の整備が該当します。一方、ぜい弱性を小さくすることは「減災」。ハードだけでなく、ソフト面からのアプローチも必要です。国民一人ひとりに災害を学んでもらう機会を設けるこのイベントも、そのアプローチの一つといえます。

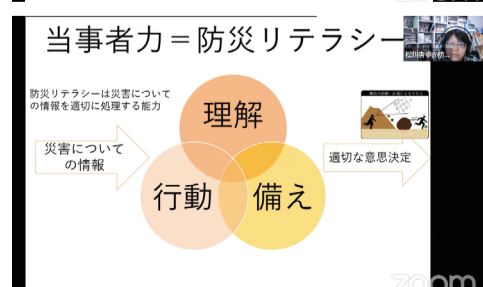
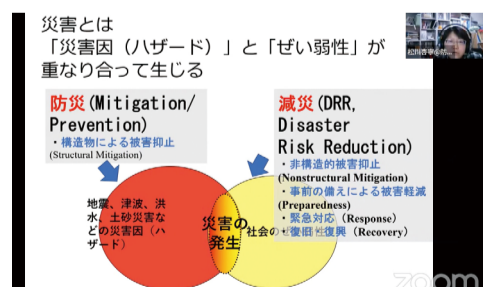
ぜい弱性を解決するためには社会全体を変えていく必要がある、と松川さんは強調します。松川さんが国内の地震発生後の状況を調べたところ、高齢者、障がい者、経済困窮者などの要配慮者は、より困った状況に置かれることが多かったそうです。特に女性は「様々な状況や環境によって、困難な状況に陥る可能性が男性より高いのが実情」でした。

このような現状を改善するには? 松川さんは「みんなに出来ることは当事者力を高める、つまり防災リテラシーを高めること」だと訴えます。災害を正しく理解し、しっかり備え、行動できる自信を持つことが大切なのです。

災害時のトラブルのひとつに、性犯罪の問題もあります。松川さんによると災害時には、警察に認知されない性犯罪の件数が増えるそうです。

こうした犯罪防止のため必要なのが、人と人とが普段からつながること。日頃から、あいさつや地域コミュニティへの参加といった活動を促すことが大切です。

「ガールスカウトの皆さんには、そのような活動を推進する人材になってほしい」と期待しています。女性研究者が発信するからこそその説得力あるメッセージで、講演は締めくくられました。



④松川杏寧さん ⑤⑥講演はスライドを映しながら進められた(いずれもオンライン講演動画より)